二次元ドリームノベルズ

18 未満

欲望特急

THE DESIRE EXPRESS

スレイブパーサー 搾精捜査

冬野ひつじ 挿絵 sasana

試し読み版

ネオブルートレイン渡嶋

路線案内図

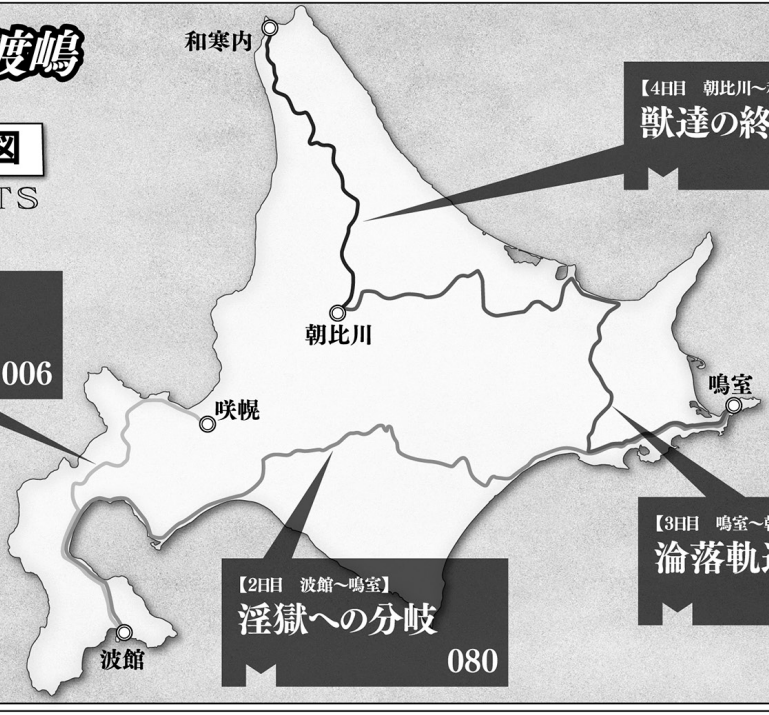
CONTENTS

【1日目　咲幌～波館】
汚辱のチケット　006

【2日目　波館～鳴室】
淫獄への分岐　080

【3日目　鳴室～朝比川】
淪落軌道　152

【4日目　朝比川～和寒内】
獣達の終着駅　220



THE DESIRE EXPRESS

欲望特急

スレイブパーサー 搾精捜査

登場人物紹介

CHARACTER

茨戸理緒 ばらとりお

豪華寝台列車『渡嶋』のパーサーとして乗車する、中央捜査局の捜査官。追っている犯人グループとは因縁を持つ。

黒岩譲治 くろいわじょうじ

理緒が追う犯人グループのリーダー格。部下を従え、『渡嶋』に乗り込んでいる。

DESIRE EXPRESS

■21：45 臥九山　ロープウェイ山麓駅　男子トイレ

「本当に、こんな場所で……その、するんですか……？」

答えは分かっていても、理緒はどうしても訊かずにはいられなかった。

（く……ッ、コイツが口になんか出さなかったら、こんなトイレで続きをする必要はなかったのに……誰かに見られたら終わりだし……それに、私のバージン……結局、コイツに散らされてしまうんだ……）

人目を避けるようにして入った男子トイレの個室。

理緒はドアに両手を貼り付かせ、尻を突き出すようにして立っている。捲り上げられたスカートから剥き出しになったショーツは、既に愛液が滴るほどに濡れていた。

「こんなに濡らしてるクセに、今更どうしたんだ？」
ショーツの上から黒岩の右手でクリトリスと膣口を弄ばれ、左手をブラジャーの中に突っ込まれながら乳首を捻り上げられていた。
「いいから、もっと尻を突き出せ」
「……ッ、はい」
灯りは煌々としているが、トイレは不気味なまでに静まり返っていた。最終便で降りた観光客達は時間を気にしてタクシーに分乗するか、乗ってきたバスまで駆け足で戻っていった。今山麓駅にいるのは理緒達二人と、あとは数名の職員のようだ。それでも誰かが入ってくる危険性はあるし、何よりもそんな場所で続きをするという黒岩の欲望の底なしさに理緒はゾッとする。
「ほら、扱くんだ」
口腔奉仕であの後も何度も射精させたのに、後ろ手に握らされた肉棒はまだ鋼のように硬い。夜風で芯まで冷えたままの手で握っても、ムクムクと更に膨らみを増す。
「んッ、んぐ……ッ⁉」
いきなり覆い被さってきた男に舌を捻じ込まれて、目を白黒させて呻くが、
「んんん……ッ！」

抵抗しようと思う間もなく、煙草の匂いと共に熱い唾液が口内に注がれていた。
（息……ッ、できな……）
先に口内を陵辱されていたせいか、初めてのキスを奪われたという感慨は浮かばない。ただ、深い敗北感に気力は削がれ、代わりに四肢の火照りを強く意識させられる。
（私の身体……熱くて、イヤらしい匂いがしてる……）
夜気に当たって引いていたはずの汗が、全身から匂いを立ち上らせているのが自分で分かった。ショーツの中からは甘酸っぱい牝臭が漂い、黒岩の体臭と混じり合って理緒の鼻腔に流れ込んでくる。
「エロいニオイをプンプンさせやがって、すっかり牝らしい抱き心地になったなぁ？」
白いブラウスの下で、カップから覗いた乳首が透けている。すっかり充血した先端が目に入る。
（これは、生理的な反応なんだからッ、コイツの愛撫なんかで感じてる訳じゃないの……ッ！）
狼狽しているところに、男の指が膣内に深々と侵入してくる。
「あ……ッ⁉」
散々弄られた肉穴は充血してぷっくりと花開き、これから受ける辱めをまるで待つかの

ようにヒクついてしまう。
「いいぞぉ……今からこのバキバキになったチンポをハメられるんだ……ハァッ、初体験が便所でしかもバックだなんて、痴女に相応しいと思わないか？」
ヌチュ……グチュ……ッ。
男の言葉に合わせるように、太い指が肉花弁の奥で蠢き、淫らな蜜を掻き出そうとする。
「んッ、く……ッ、ふぅぅ……ッ!?」
その指にまるで支配されてしまったかのように、理緒の腰からは力が抜けていった。
（痴女じゃない……ッ！　任務じゃなきゃこんな真似……ッ、んッ、誰がするもんかッ！）
「これまで数えきれない女を抱いてきたが、お前のような、そそる女は本当に久し振りなんだよ」
（くッ……その中には、私のお母さんも入ってるんだッ！　あの時もお母さんを、はぁッ、こんな風にオモチャみたいにして犯したのね……ッ!?）
そう思っているのに、仰け反った白い喉をひくひくと震わせるので精いっぱいだ。その腰を抱き寄せ、黒岩は屹立したペニスをヒップの割れ目に添わせる。
「ん、くふぅぅ……ンッ!?」
亀頭がニュルンと膣口に押し入り、理緒はドアに手を突いたまま身震いした。

（私、初めてをこんな……ッ!!）
指とは全く違う強い感覚に、声が漏れてしまう。
「よし、挿入れるぞ……ッ！」
「んんんッー!?」
心の準備ができていないまま、理緒は男の肉棒に貫かれていた。
（いッ……痛い……！　動かさないで……！）
山頂からここに来るまでの間も焦らされ、たっぷりの愛液で満たされていた膣内は、想像よりはスムーズにペニスを受け入れている。それでもやはり、奥に行くほどに肉を割かれる感覚と疼痛が大きくなって、背中は大きく撓んだ。
「どうだ？　ついにチンポに犯された気分は……ッ、ロープウェイの時からずっと欲しくて堪らなかったんだろッ!?」
（違う……ッ！　私は、捜査のために誘っただけでッ、本当にこんな事がしたい訳ないッ！）
頭では抵抗できているのに、実際には男が突き込むたびにお腹の奥はズンズンと深く押され、まともな声が出てこない。
「んッ、ふぅぅッ……んあッ、あふぅン……ッ！」

仰け反ったままで乱れた髪を揺らし、理緒は涙の滲んだ目で天井を見る。
ズプ！　ズッ！　ズプッ！　ズチュ……ッ！
犬のように片脚を上げさせられて、ハイヒールが揺れる。腿の内側は愛液が幾筋も流れて失禁したかのようだ。
「あぁッ、想像通りの極上マンコだ……たった十万でこんなマンコが手に入るなんてなぁ……ッ、本当に渡嶋のおもてなしは最高だ……ッ！」
譫言（うわごと）のような男の声を耳元で聞きながら、理緒は痛みを紛らわせようと唇を噛んだ。
（でも、これで、もう、この男は私の膣内に精液を出す……ッ!!）
乳房を揉まれ、肉棒で掻き回され、幾つもの振動が合わさって子宮を震わせている。
（これで、もうッ、終わり……ッ、だ、だからッ、そんなに乱暴にしないで……ッ！）
官能の火花が、腰で、乳房で、小さく弾け始めた。
「んッ、ふッ……んんッ、くぅッ！」
男は理緒の腰を両手で掴まえたまま、バックから激しい抽送を繰り返す。
「せっかくの処女マンコ、フゥ……ッ、真っ黒になるまで使い込んでやる……ッ、終点までずっと可愛がってやるからなッ！」
興奮しているのだろう、腰を打ち付けてくるリズムが滅茶苦茶だ。

「くッ、んんッ、んッ、んッ！」
今の自分はまるで研修で見たレイプ動画のように激しく突かれている。そう思うと、屈辱で涙が滲む。半面、抽送のリズムが乱れてきた分、膣襞は逃すまいとするかのように肉棒の先端を締め付け、子宮口に少しでも当たるように射精に向けて着々と準備している。
「お前のマンコがイヤらしく絡み付いてくるよ……あぁ……ッ、すぐに出てしまいそうだ……ッ」
バチュッ、バチュッ、バチュッ、バチュッ！
結合部は受精の準備が完了していると言わんばかりに水音を立てて牡を煽る。
「ほぉら、子宮が降りてきた……ッ、分かるかッ⁉　ザーメン欲しがってチンポの先にチュウチュウ吸い付いてるのがッ、分かるだろ……ッ⁉」
黒岩の汗と理緒の汗が肌の上で絡み合い、一つになる。トイレの個室は今や熱気と目眩がするような性臭で充満していた。
「や……ッ、もう、だめッ……です……ッ！」
男の動きが更に荒々しくなった。理緒は男の絶頂が近い事を感じ取り、唇を震わせる。
「おらッ、出すぞッ！　出すぞッ！」
「んッ……くぅ……ッ、だ、出して、くださいッ！」

仰け反った視線の先に見える鋭角のシンボルブリッジが、ガクガクと揺れている。空の下で犯されているという実感が膨れ上がる。
「どうだ……ッ、子宮の入口に当たってるのッ、感じるかッ!?」
小暮の方もまた、アクロバティックな動きで興奮しているのか、半開きの口の端から涎を垂らし、その口で理緒の首筋や唇を吸ってきた。
「ひぁッ!?　か、感じますッ！　当たってますッ！」
息を吸おうと口を開くと、嬉しそうに舌を差し入れ、ジュルジュルと唾液を吸う。
「ふぁ……ッ、感じてるんだな……ッ？　ココが感じるんだなッ!?」
男の腰が、突き上げる動きから押し付ける動きへと変わった。
（んぁッ!?　そんなにギュウギュウされたらッ、何かきちゃう……ッ!?）
「黒岩はッ、こんな所まで可愛がってくれなかっただろッ!?　なぁッ!?」
無我夢中といった感じで、小暮は理緒の全身を弄り、何度も何度も確認する。
「ココは初めてなんだろ……ッ!?　オレのチンポ……ッ、ハァッ、イイだろ……ッ!?」
（あッ、そこ……ッ、コリコリした所に、オチンチン押し付けられるの……ダメ……ッ！）
ピストンは止み、代わりに小暮は理緒の子宮口をじわじわと揺さぶるように、亀頭を押し当てていた。

「あ……ッ、ひゃう……ン⁉」

臥九山のトイレで黒岩に最初に犯された時も、亀頭で子宮口を強引にこじ開けられている。だが、その時はまだ快感というよりも違和感や衝撃の方が強く、何をされているのか分からないままに射精されて終わったという印象だ。

（アイツのとはまた違って……ッ、コイツの、この動き方……はぁッ、犯されてるのは同じなのに、全然……ッ、感じが……な、なんで……⁉）

黒岩の時とは違う。小暮の肉棒が当たっている箇所が、自分の性感帯なのだとはっきり感じる。圧迫されているのに苦しいとは感じない。いや、苦しい事に変わりはないが、甘さ交じりの苦痛は心地良くすらあり、膣内にぴったりと密着したペニスの熱や形が頭の中にまでダイレクトに伝わってくる。どこを締め付ければ快感の声を上げさせられるのかまで、自然に分かってしまう。

（やだ……ッ、このまま続いたら、私……ッ、本気でキモチ良くなっちゃうッ！）

コツコツコツと、絶え間なく子宮口をノックするかのような、偏執狂じみた腰の動きに、昨日まで処女だった乙女はただ翻弄される。

「分かるかッ⁉　子宮が降りてきてッ！　オレのチンポにチュウチュウ吸い付いてるの……ッ！」

（こんなのおかしい……ッ、絶対ッ、はぁ……ッ、おかしいのに……ッ！）
「あひ……ッ、そんなッ、わ、分からな……ッ」
思うままにならない身体に苛立ちながら、快感の螺旋を引き摺り上げられ、上り詰めていく。
（犯されてるのに……イってしまう……ッ！）
女体の反応に手応えを感じたのだろうか、理緒を抱え込む男の腕に一層の力が籠もった。
「ポルチオでイかせてやるよ……ッ、そら……ッ、潮吹けッ、潮……ッ！」
腰を回すような動きから一転して、小暮は直線的なピストンを猛然と打ち込み始めた。
「ああッ、あッ、あぁぁ……ッ……!?」
ぱちゅん！　ぱちゅん！　ぱちゅん……ッ！
肉を打つ音と乙女の叫びがホームのコンクリートに鳴り響く。
（こんなの……ッ、もう、逃げられない……ッ！）
広げられた脚が宙に伸びたまま、打擲（ちょうちゃく）の激しさにピクピクと痙攣している。それはさながら肉食獣に捕らわれた獲物が内臓を貪り食われている姿だ。
（そんな！　イくなんてッ！　ダメッ！　私ッ、捜査官なのに……ッ！）
少しでも絶頂を遅らせようと、小暮の首に回した腕に力を込めたのがいけなかった。

「あ、あぁぁぁッ!?」

互いの身体が更に密着したせいで分散していた力が全て結合部に集中し、理緒の膣は肉槍の与える快感をダイレクトに受けざるを得ない状態になってしまったのだ。

（えッ!?　あ、コレ……ッ、ダメッ！）

黒岩のそれとはまた違った荒々しさに、頭が追い付かない。理性が働かない。存在すら知らないでいた自分の中の牝の部分が頭をもたげ、歓喜の喘ぎを絞り出そうとしている。

「ひゃう!?　だ、ダメッ！　ダメ……ッ、こんなッ、い、イっちゃう……ッ！」

射精を求めて降りてきた子宮が、初めての絶頂の予感に大きく震えた。

「な、何ッ、何これッ!?　すごいッ！」

「イくの初めてかッ!?　オレが初めてか……ッ!?」

熱病に浮かされたかのように、小暮は理緒の首筋を激しく吸う。

「ガマンしないでイけよッ！　オレのチンポでイっちまえッ！」

（イきたくなんか……ッ、な、ないのに……ッ！　コイツの動きッ、すごすぎ……ッ！）

強烈な快感に、視界の中で一面に星が弾けた。

じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽッ！

小暮と理緒、二人は固く抱き合いながら快楽の階段を一気に駆け上がる。

捲れ上がった青いスカートの中に外に、白く泡立った愛液が飛ぶ。
「あぁぁッ、あ、あぁぁッ、イきます……ッ、イっちゃいます……ッ！」
オーガズムの波に呑み込まれたのは、理緒の方が先だった。
「ふぁ……ッ、ふぁぁぁン……ッ⁉」
両の爪先を空に向けて、新人パーサーは生まれて初めての絶頂の喘ぎを放っていた。
そして、
（お腹の奥から……ッ、なんか、出る……ッ⁉）
「……ッ⁉」
全身が強張り、呼吸が止まりそうになった。
そして――。
「いやぁッ⁉　み、見ないでッ！　見ないでくださいッ！」
何が起きているのか分からないまま叫ぶ理緒の身体を、小暮はヒョイと横向きになるように抱え直す。
「あぁぁッ、出るッ！　出ちゃいます……ッ‼」
絶叫と共に、理緒の股間から飛沫が勢い良く撒き散らされた。
プシャァ……ッ！

「いやぁッ！　あはあぁン⁉　あああぁぁぁン！　はあぁぁぁッ⁉」
小暮の腰が白いヒップを打ち付ける。タイミングを合わせて黒岩の腰が砕けよとばかりに蜜壺を突き上げる。
「ひゃううッ⁉　ひゃッ、はぁぁッ、んあぁッ！　あッ、はぁぁッ！」
これ以上ないと思っていたポルチオ絶頂を遥かに上回る快感に、理緒は我を忘れていた。
（お尻もアソコもッ、限界まで広がってる……⁉　こんなの無理ッ！　無理なのにぃぃぃ……ッ！）
既に肉を広げられているという感覚は、痛みを通り越して快感へと変換されている。排泄孔を犯されているという屈辱も、歪んだ快感へと捻じ曲げられている。もう、何をされても気持ちがいいとしか脳は認識できなくなっていた。
「はぁッ、あッ、あッ、ひあッ、んあぁぁン！」
黒岩の肉棒と小暮の肉棒が、理緒の中心で荒々しくぶつかり合っている。
愛液と腸液がグジュグジュと飛沫を飛ばし、絡み合う裸体を淫臭で包んでいく。
（何これ……ッ、気持ちイイの全然止まらないッ⁉　はぁッ、イってるのに、もっとイっちゃう……ッ⁉）
「すげえッ、ケツマンコいいよッ！　ケツ穴最高！　おおおおッ！　くるッ！　玉から

スペルマ上がってくるの分かる……ッ！」
小暮も、理緒への初めてのアナル挿入に興奮が止まらないのだろう、何の遠慮もなく直腸の襞をペニスで捲り上げては、乱暴に押し返して己の欲望を暴走させている。
「ほらッ、マンコもしっかり締めろッ！　そんなにケツでチンポ咥えるのが好きならこのままケツとマンコでイっちまえ！　アクメ地獄を見せてやる……ッ！」
（や……ッ、そんなッ、アクメ地獄なんて……ッ、そんなの見たくないッ、知りたくない……！）
現実とは思えないほどの快感に、自分が上げているのが喘ぎなのか泣き声なのか分からなくなっていく。二人の男達に挟まれた自分の身体が、まるで漂っているかのような浮遊感に、上下左右の感覚すら失われつつあった。
「リュウそろそろ出すぞ！　いいなッ⁉」
黒岩が小暮の名を呼んでタイミングを計っている。
「ハァッ、いいんですか……ッ⁉　ケツん中に思いっきりぶちまけちゃいますよッ⁉」
頭の上で陵辱者達が息を荒らげている。終わりはもう近い。そして、それはまた理緒にとって取り返しのつかない終わりでもある。
「やッ、このまま出すのだけは……ッ、許して……ッ！」

「アハハッ、バカな女だ……ッ、さっさと服従していればまだ人として扱ってやったかもしれないものをッ！　俺達に復讐したいなんて思ったのが運の尽きだったなッ！」
頭を左右に振りながら少しでも絶頂を先延ばしにしようとしている女捜査官の頭を、横から伸びてきた手が押さえ付ける。
「口も塞いでやれ……ッ、手も遊ばせるな！　この牝の全部を犯し尽くしてやれ！」
黒岩と小暮に羽交い締めにされたまま理緒は再びベッドの上に転がされる。
「ぐむううぅ⁉　んんッ！　んぶぅぅんッ！」
立ったままニヤニヤと見物していた九鬼と蛭間も加わり、理緒の身体はまるで貪られているかのように男達の身体の下で浮き沈みを繰り返す。
「んッ、ふぅぅ……ッ、んぶッ、うぐぅぅ！」
横を向かされ口の中に男性器が押し込まれ、誰のモノか分からないままにピストンが始まる。喉の奥にまで肉槍が進入してくるが、逃れようとして目の前の男の腰を押し返しても、その手は別の男に掴まれ、掌を広げられると勃起を掴まされ、魔法にかけられたように自由が利かなくなってしまった。
「んぐッ、んぶ……ッ、むぅぅッ、んぶぶッ⁉」
左手にペニス、右手は手首を掴まれ動かせない。四本の男根で同時に犯され、自分が人

の形をした肉の塊になっていくのを感じているしかない。
「いいぞッ、手コキも最高だッ！　もう俺のチンポも好きで堪らないだろ……ッ⁉」
聞こえてくるのは蛭間の声だ。自分はもう手だけでこんなに男を悦ばせているのかと驚きながらも、愛撫する手は止まらない。
「咽喉マンコも最高だぞ……ッ！　ケツだけじゃもったいないくらいだッ！」
負けじと九鬼もイラマチオのラストスパートをかける。
「いい穴だッ！　ンアッ、ハァァッ、このままもっと調教してやるよ……ッ！」
「んぐぅぅッ⁉　ンッ、ぶッ、んぶぶぶッ、んぐぅぅぅンッ⁉」
罵声なのか称賛なのか、あるいは両方か。
理緒の耳には既に意味のある言葉は聞こえなくなりつつある。
「よし……ッ、そろそろトドメだッ！　イけッ！　母親と同じように四本差しにされてイき狂え……ッ！」
黒岩の罵声と共に、全身を快感の電流が駆け巡る。
「んぐぅぅぅッ⁉　ンッ、んんッ……！」
四人の男達が一斉にピストンを速めた瞬間、理緒は仰け反ったまま声にならない絶叫を放ち、全身をレイプされる凄まじい快感を知った。

（ああッ！　オチンチンでッ！　こんなにたくさんのオチンチンで、私の身体ッ、犯されてるぅぅ……！）

性感帯という言葉が意味を失うくらいに、男性器を握っている掌までもが快感を覚えている。どこもかしこも熱く、触れられた箇所からゾクゾクと電流が走っていく。

「んんッ、ふぅぅッ！　ふぅぅぅンッ、んッ、んじゅッ！　じゅぶぶぅぅぅッ！」

理緒は自らも激しく腰を揺する。もう、無我夢中だった。

「このままイくんだ！　もう人には戻れないような絶頂を教えてやるッ！」

黒岩の目配せで、小暮が腰を持ち上げるようにして解れきったアナルをずぶずぶと貫く。

「んひいぃぃぃ⁉」

緩急をつけて黒岩が理緒を揺さぶった。

（あああぁぁぁ！　奥までグリグリくるぅぅぅ！　お尻もアソコもオチンチン締め付けるの止まらないぃぃッ！）

肛門と膣が二本の牡を放すまいと締め付け擦る。

「うううッ、すげぇッ、ケツマンコ締まるッ！」

「口もヤバい……ッ、ンアッ、オヤジさんッ、もう出そうだ……ッ！」

悲鳴にも似た喘ぎに、黒岩も限界を悟ったようだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！

【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！

【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱！ ヒロインのピンチ満載!!

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月発売!

あなたのキモチイイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌

全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も好評発売中

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:(03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索